

感謝寸言

今日を無意味に動く者は、一生を無意味に送る。

一事を軽々しくするものは、万事を軽々しくする。

無意味に動いても、やがてそれから起こった事は、深い意味をもって迫って来る。軽々しく動いても、それから巻き起こされることは、やがて重い圧力を持つてせめよって来る。

重々しい人生の歩みは、仏の教の言々句々を重々しく受け取ることによつて生れる。

「尊重すべきは世尊」であり、聖賢であり、聖人である。

しかし、世尊聖人を尊重するとは、その教を尊重することである。

世尊聖人のみ教の前を素通りするものは、恐くは人生を素通りするものである。何と私の素通りの多かつたことよ。

口に摂りし美味美食は、去つて見れば、あとかたもない。

耳に聞いて身にしみた教だけは、年経るままにいよいよ我が真の身代であることが知れる。

如来の御回向であるとしみじみ頂けたことだけが、その人のものになっている。知った私が賢^えらかつたり、努力した自分を認めていたりしている間、まだまだ自分のものになつてはいない。

法を領解するのに、苦しんだり努力したりしたのは、私が愚であり、憍慢であり、邪見であるために、あなたに骨を折らただけのことである。

信と、忠と、孝とが、一番易いのに、凡夫の為には、難中の難となる。「往き易くして人無し。」

私の周囲には、沢山な念仏の同胞を賜うた、これ以上の有難いことも、奪いこともあり得ない。それらの方は、皆、魂を打込んで、護念証誠して下さる、この護念証誠によつて、往生させて頂くのである。

私の行くところ、何処も、何時も、有り難い処ばかり、有り難い人ばかり、ああ。何ということか、何という幸か。分々秒々、歩々声々のこの念い、じつと見つめて、捨てられぬ捨てられぬ。

いくら私の話を聞き、私の書いたものを読んで下さつて、それで助かつて下さつた方があつたにしても、私の力では微塵もない。

その証拠には、私に近い人ほどみ法が生きているか。そうではないじゃないか。聞かぬものはどうにもならぬではないか。その人の宿善が有難いのだ。如来の御仕事なのだ。

お念仏申しつつ、み法を頂戴しつつ、あるがまま、出て来るままを頂いてゆくと、面白い。有り難い。有り難い如来大悲の廻向。

法を求めるのに、何が一番大事かと問われたら、

「我が法を聞くことはもやすが、法で我を聞くことは難しい。これだけは、いやはや、難中の難である。よほどよほど頭を下げた気でも、これは出来ていない。」と答える。